



## 学生による 先輩 インタビュー

Tsuchikawa Kenji  
**土川 健之 氏** OB  
岐阜大学農学部OB  
日本中央競馬会 理事長

### PROFILE

滋賀県近江八幡市出身。地元中学、彦根東高、獣医師を目指した岐阜大農学部でもバレーボール部に所属。68年にJRA入会。栗東トレーニングセンター診療所時代の71年には、関東を襲った馬インフルエンザの防疫に尽力、78年には骨折が原因の蹄葉炎(ていようえん)でこの世を去った名馬テンポイントの大手術にも立ち会った。  
<http://www.iza.ne.jp>より抜粋

## 獣医師として、社会人として、 未来を生きるヒントをたくさんいただきました。

卒業を1年後に控え、将来への期待と不安を抱く学生を代表し、獣医学科6年の中村諒子さんが、岐阜大学農学部OBで日本中央競馬会理事長の土川健之氏を訪問。これから社会人としてどう生きるべきかを模索するすべての学生にとって、非常に示唆に富む内容となりました。(文中敬称略)

### それで、獣医の勉強は研究室に入ってから一生懸命したんです。

**中村:**まず、土川さんが競馬会を選ばれたきっかけや入ろうと決心した経緯を聞かせていただけますか？

**土川:**僕の所属は外科の教室でした。競馬会は先輩がたくさんいることもあって、受験に違和感がなかったのかひとつ。あと、体が大きいということ、まあ小動物も似合わないだろうと(笑)。

競馬会に入るには馬の臨床をすることが条件のひとつ。本当はもっと基礎の学問とか入試の勉強はあるんだけど、獣医っていう一部の世界で採ってもらえたんで、獣医のことしか頭になかったの。それで、獣医の勉強は研究室に入ってから一生懸命したんです。

**中村:**もしも競馬会に入っていなかったら、今ごろ何をしていたと思われませんか？

**土川:**体質に合うかどうかは別として、滋賀県の公務員かもしれないね。獣医師というのは衛生関係の仕事もあるから、県庁としても欲しがってる。

ただし研究肌ではないですね。やはり現場がいいかな。

### そうして仕事を積み重ねてきた今、人と会えたというのが非常に大きな財産だと思う。

**中村:**これまで一番印象深いお仕事は、新聞記事で拝見していると名競走馬「テンポイント」のお話がよく出てくるんですけども、そのような仕事に携わってきた中で感じる獣医師の使命や強みはどんな点ですか？

**土川:**非常に頼っていた点だと思う。競馬会はいろんな人たちが馬を中心に回っている世界。馬を中心に話をするものだから、獣医師は大事なポジションにいるんですね。特に現場はね。そういう意味では、馬を通していろんな人をよく知ったというか、馬主さんもそうだし、調教師さんもそうだし、騎手の人も馬を世話している厩務員の人もそうだし。そうして仕事を積み重ねてきた今、人と会えたというのが非常に大きな財産だと思う。

それと、馬を競馬に出して勝ってもらうという喜びがないと、病気を治すだけでは一人前じゃないと思っています。

### 全般を知ることじゃなくて、自分の興味のある知識を深めたほうがいい。

**中村:**現場で長い時間を過ごされたと思うん

ですが、若い獣医師さんを見ていて、学生時代にこういうことを経験しておいて欲しかったという思いはありますか？

**土川:**全部を知らなくていいから、「自分はこれ！」という専門分野を一つか二つ持ったほうがいい。就職先によって、自分の持っているものが必要か必要でないかはなかなか分からないけど、それでも役立つ時が来るのね。直接的には役立たなかったとしても、「学生の時と同じように勉強すればそこまではなれる」という段階を踏んでいる、そのプロセス・経験が違う場面に活かされると思う。だから、全般を知ることじゃなくて、自分の興味のある知識を深めたほうがいい。

あともうひとつ。僕自身、学生の時に何を頑張ったかという、仲間もそうだし、特に先生とのコンタクト。これは非常に楽しかった。研究室に残って勉強していると、先生がそれを見て「そんなとこ試験に出さない」と言うんだけど、次の日ちゃんと出るんだよね(笑)。そういうこととか、あと、一緒に酒を飲んだり(笑)。

**中村:**今でも飲み会は何かかかりますよ。理由をいろいろ付けて(笑)。

**土川:**先生と学生というのは、先生のほうがいろんな経験を積んでいるわけだし、先生の持っている良いところを共有することが大事。岐阜大学の伝統として、ずっと残してほしいと思っています。

### 大事なのは「自分に偽らないで生きられるか」ということだと僕は思う。

**中村:**土川さんにとって、人間形成に最も影響を及ぼしたことは何ですか？私の場合は、剣道を10年くらいやっていて、そこから得たものは大きいなと思っているんですけども…。

**土川:**僕は大学時代にノレーボールをやって、キャプテンまでやらせてもらった。そういうものを一生懸命やることでわかったのは、人間は何かと怠けたりするんだけど、最後には自分に返ってくるということ。「これは怠けているんだ」と自分で自覚して怠けるのはいいんだけど、そういうことだと僕は思う。自分に対して誠実というか、それだけはずっと変わってない。

**中村:**ノレーボール部のキャプテンとして部員をまとめていくということが、今こういう大変な役職を務めていらっしゃることに役立っていますか？

**土川:**まとめるということ、大事なのは、相手はどう思っているかということ。まとめる自分のことだけを考えたら、自分のエゴが出るだけで駄目です。何でもそうだけど、自分が発言した時に「相手はどう思うだろう?」「相手は今なんで不満なんだろう?」ということを考えてやらないとまとまりがでないと思うんだよ。

上になればなるほど相手の話を聞くことが大事。よく話を聞いてあげて、相手のことを考えることが人をまとめるためには一番大事なところ。これは、今の競馬会でも一緒だと思うんだけどね。

### 獣医っていうのは、全部の患者を見なきゃいかん。感傷に浸ってるようじゃ駄目なのね。

**中村:**人のつきあい方というのは、そうやってまずは相手の話を聞くところから始まるんですね。でも、動物相手となると、動物ってしゃべらないですよ。

**土川:**実はね、動物というの、世話してくれている人をいちばん親しく思っていて、親とか主人だと認めている。それで馬の場合は、獣医師が患者の持ち主と話をしている、それをじっと聞いているんですね。私の主人とどういう立場で、どういう感じているのかの様子を伺っている。厩務員さんなり調教師さんが、獣医師の僕の話に「そうですね」と納得すると、馬は安心するんです。そこまでなれば、僕が触れることを馬はちゃんと許してくれる。

それで馬に「あなたのために治すんだし、注射こう打つよ」と言って打つんです。本来は嫌がることを、注射を打つてもおとなしくしてる。こういうこと、今までやってきて間違いないんじゃないかなと僕は思ってるし、だから、犬にしても、猫にしても、動物はなんでも人間の話を聞いてるんですよ。

**中村:**そうすると、競走馬にとっては、治らない故障をしたら安楽死という選択がありますよね。これに対してはどう思われますか？

**土川:**競走馬というのは、ファンにとってのアイドルでもあるんだけど、あくまで経済動物のひとつ。大きな故障をした時、テンポイントのように、あそこまでの大がかりな手術が必要かどうかっていうのは非常に疑問なところはあります。大きな動物で、ああいう複雑骨折になってくれば、安楽死の名の通り、その選択は患者にとっては非常に安らくなるんじゃないかって。闘病生活は非常に苦しいからね。テンポイントの場合は、結局は蹄葉炎で自然死というか、最後は蹄から出血して死んでしまったんだけど…。

ただ、テンポイントいろいろと治療を尽くしたこと、手術したり、ギプスはどうすればいいとか、文献を読んだり、今までにない手術のやり方をしたりしたこと、次に同じような馬が出た場合にどうしたらいいかということがわかって、後の馬が随分と助かった。そういう技術を勉強させてくれたという部分では非常に大きい。麻酔も手術器具も今は随分と良くなったので、早く手術ができるようになった。でもね、今までの経験の中で、これ以上苦しめるのはその患者に対してかわいそうという時には、安楽死という選択もあり得る。そういうふうにも思いますね。

**中村:**将来の道考えた時に、例えば臨床に就いたとしたら、ペットが治らない病気にかかった際、それを告げられて泣き出す飼い主さんに対して、そういう責任を負っていきけるのだろうかと思ったりもするんですが…。

**土川:**一番大事にしてるのが亡くなった、もう助からないというのは誰もが悲しいことで、これは僕でも一緒。でも、獣医っていうのは、全部の患者を見なきゃいかん。感傷に浸ってるようじゃ駄目なの。「自分が持っている最善のことをした」という自信がないと、ずっとやっていけない。

「この子のために、自分が持っているものを全部出した」となれば、たとえ助からなかったとしても精神的には非常に安定してる、それが獣医師の本来あるべき姿、求められる姿だと思うね。

**中村:**経験を積んでいけば、それは乗り越えていけるでしょうか？

**土川:**獣医師なら、それは乗り越えなきゃいかん。

### 与えられた仕事を目いっぱいやっているかどうか、それが努力だと思う。

**中村:**失敗のご経験をどのように乗り越えていかれましたか？

**土川:**失敗というのは絶対あるんだよ。それが後でわかる場合、つまり勘違いをして、結果的に間違っていたということもあるんだけど、あつ

て当然だと思わないとね。順風満帆で何もかも上手くいくなんてあり得ない。失敗は好んでやるものじゃないし、悔しい思いとか確かにあるわけ。自分の期待通りに上手くものが動いてないとか、そういうのが一番悔しいよね。努力したのに報われなかったというの、これは失敗というか、悔しさというか…。でも最近、「あの時に悔しいと思っただけ、あれが糧になって良かったな」と思うようになりました。

持って生まれた「親からもらった能力・知力」は誰にでも備わっていて、あまり差はないと僕は思っている。どこで差が出るかと思ったら、普段の自分に与えられている仕事に対して「努力」しているかどうか。これがないと、いくらチャンスが来てもチャンスじゃなくなる。チャンスというのは普段からの努力がないとあり得ない。まさしく僕なんかは理事長になったのも、僕に特別な能力があったからじゃなく、それは、与えられた仕事を目いっぱいやっているかどうか、それが努力だと思う。

それと、努力というのは誰かに認めてもらうものではないということ。認めてもらうための努力は努力じゃない。あくまでも自分の仕事に対して努力する。他人の評価を期待しても、「こんなに努力してるのに誰もわかってくれない」と腹が立つだけだし、本来の努力の意味から離れてしまっしね。

### 自分で時間をコントロールできる学生の間は、とにかくボーっとしない。

**中村:**最後に、今の学生に伝えたいことは何ですか？

**土川:**もう、いっぱいあるよ(笑)。学生には本当に自由な時間がものすごくあるから、とにかく何でもいい。遊びでも、スポーツでも、本を読んでもいいし。社会に出ると時間に縛られるから、自分で時間をコントロールできる学生の間は、とにかくボーっとしない。それだけです。ぜひやっておいてください。

**中村:**わかりました。今日は、獣医師として、社会人として、未来を生きるヒントをたくさんいただきました。自分を見つめ直すいい機会になりました。ありがとうございました。

**土川:**頑張ってください。応援してるから。

### 今回の在学生訪問者



Nakamura Ryoko  
**中村 諒子**  
農学部  
獣医学科 6年

Visitor